

〈巻頭エッセイ〉

思い出すこと 二、三

磯貝英夫

一

『近代文学試論』が第五十号を迎えるという。もうそんなになるかと、改めて、歳月の経つことの速さを感じる。当初の三年間は年二回の刊行だったから、創刊以来四十七年になるわけである。この長期間、途中休刊もまったくなく続いてきたことは、むろん、めでたいことである。

編集部の請いに応じて、昔の思い出を書くことになったわけだが、記憶がすっかりあいまいになってしまっていることが、もどかしい。

私が、広島大学文学部に、日本近代文学専門の助教授として赴任したのは、一九六一年（昭和36）である。その私のもとで『近代文学試論』が刊行されはじめたのは、その五年後、一九六六年（昭和41）である。

その辺のところからすこし整理して書いてみたい。

広島大学文学部文学科の国語学国文学専攻は、第一、第二、第三の三講座を持つ専攻として、戦後に出発した。スタッフは、旧制の広島文理科大学のスタッフに、広島高等師範学校の関係スタッフが加わるかたちで、出発したのである。そのスタッフの専門の関係で、第三講座でいえば、長く、近世国語学・国文学講座という実質で運営されてきた。そのお一人の退官を受けて、そのあとに私が近代専門として入ることになり、そこで、全講座の整備完了ということなのか、やがて、講座の名称も、ナンバーを廃して、国語学講座、古代中世国文学講座、近世近代国文学講座と名づけられることになった。ただし、こうした構想が、専攻内でいつごろから固まったのかは、私にはわからない。

いささかわざらわしい記述になったが、要するに、広大文学部の国語学国文学専攻では、近代文学が最遅参の研究領域であったということである。むろんこれは、たまたまそうなったということではあるが、考えてみると、全国的な傾向と連動するものでもあった。戦前の国文学会では、近代文学は学問の対象とするにはまだ早いという考えがほ

ば共通認識となっていた気配があり、そんな常識が解体して、学会内で近代文学研究が盛んになってきたのは、戦後のことである。先駆者は別とする大勢の話だが、広大文学部における講座整備が、この趨勢に沿って実施されたことは、言うまでもないことである。

こうして、前身を含めての広島大学に、初めて、日本近代文学研究の種が一粒落ちたわけである。

一方、若い学生諸君の方が、彼らが、より身近な近代文学に関心を強く持つのは自然のことで、私がかかわるようになってから、近代文学研究を目的として大学院進学を希望する者が相次ぐようになった。

そういう諸君の間から、自前の専門研究誌を持ちたいという要望が、いつごろ、どんなふうにして盛りあがってきたのか。残念だが、具体的なことは、今の私の記憶からは脱落している。当時の院生の一人の述懐によると、私が慎重で、なかなか許可が得られなかったという。私が反対であったわけはない。私のためらったとすれば、責任者として、持続を第一義として考える時には、もう少し基盤を厚くしてからが望ましいと思ったからではないだろうか。

こんな言いかたをするしかないのは、つまるところ、私を受け身でかかわってきたことによい証左であろう。そんな私が、雑誌創刊事情にこれ以上立ち入ることはない。

結局、院生諸君の情熱に多分私が折れるかたちで、『近代文学試論』が創刊されたのは、一九六六年（昭和41）五月。念のため、資料によ

ってたしかめると、その前年度は、近代文学専門の大学院生は五名。なるほどと思う。

国語学国文学専攻全体の機関誌としては、『国文学攷』があるのだが、もう手ぜま。全国誌に問題はないとしても、若い院生がすぐ利用できるものでもない。できれば自前の専門誌がほしいという要求が出てくるのは当然と言つてよいだろう。

〈近代文学試論〉という名前が出てきたとき、私は、手を拍ちたい気持ちになったことを思い出す。別に、論文の完成度を競うこともない。多くの試みを通しての成熟、もつと端的に言えば、多くの試みを通しての自己発見の道程——若い研究者にとって必要なのはそういうことだと、考えていたからである。

私の役割の一つは、近代文学研究への意欲を持ち続けている先輩諸君（私自身の先輩も含む）に声をかけることであつた。ほかに、関連論文を呼びこんで、かなり多彩なかたちで、『近代文学試論』は進出した。

いま、初期の『試論』の「編集後記」をまとめて読んでみると、編集担当の大学院生たちが、ほとんど申し合わせたように、〈文学研究とは何か〉といった根本問題について、それぞれの意見を展開していて、なかなかの読みごたえがある。身近な作品に切りこもうとする若い研究者たちの情熱のかたちが伝わってくる。『近代文学試論』とは何か、と問われれば、「編集後記」を読むように、と答えたい思いが私にあつた。

『試論』は、最初三年間は年二回刊行だったが、四年目の一九六九

年（昭和44）から、年一回刊行に切り替わった。これには、大学紛争がかかわっていたことも言っておきたい。私個人としては、新設広報委員会の委員長として引つ張り出され、大学本部に毎日詰めるといった、異常の年であった。私は、思うところがあつて、そうした委嘱を受けることにはいささかのためらいもなかったが、そんなことにも賛否の声がおこる一時期であつた。本部キャンパス封鎖——機動隊導入。——そういう混乱のなかで、研究誌の一回分が飛んだのは自然のことで、以後は、その方が常態ということになつたわけである。長期持続のためには、それがむりのないペースであつたということだろう。

早稲田の川副国基氏によつて、『試論』が、大学単位での近代文学研究誌の最も早いものとして学会誌に紹介されたのは、いつのことだつたのだろうか。そのうち、冷やかし半分に、〈広島軍団〉などと呼ぶ声が、耳に入ってきたこともある。それはとにかく、第十号と第二十号の節目の年に、重ねて、井伏鱒二という、郷土出身の大怪魚をからめとろうと、総力をあげて網を張りめぐらせた二特集は、いろいろな意味で、よい試みであつたと、今も思う。

個人個人について言つてみても、目次を拾い読みしていると、それだけで、各自の成熟の過程が浮かびあがつてくるようで、なかなか興味ぶかい。自前の雑誌を持った意味は十分あつたと判断してよいだろう。

私が、停年で広島大学を去つたのは、一九八六年（昭和61）。その時、『近代文学試論』は第二十三号に達していた。その後も、一度の

休刊もなく続いて、今回、第五十号に達するわけである。やはり感慨がある。この間の時代の変化は大きいが、スタイルもまったく変わっていない。よく持続してもらえたものと思う。後継諸氏の意欲と努力に感謝したい。

## 二

『近代文学試論』にかかわる私の思い出はまずこんなところだが、ゆとりがあるようなので、思いきつて、記憶をもう少しさかのぼらせてみたい。

私が、中学校（旧制）を卒業して、広島高等師範学校へ進学したのは、一九四〇年（昭和15）四月、広島文理科大学卒業と認定されたのは、一九四五年（昭和20）九月である。まさしく、戦争の申し子と言つてもよい世代である。いまや遠く隔たり、忘却の海に沈むあの時代——管見に映つたその時代相の一部を、思い出すままに記述しておくことも、まったく無意味ではあるまいと思われるので、しばらくそれを。

私の中学五年時、一九三九年（昭和14）五月に、天皇より「青少年学徒二賜ハリタル勅語」下賜。その式典があるというので、五年生一〇名が代表として選ばれ、ゲートル、帯剣、肩に鉄砲といういでたちで、校長と配属将校に引率されて上京した。私もそのなかにいた。初めての上京である。そして、全国から参集した三万余（そう聞いた）の学徒が、宮城前広場で、昭和天皇の前で分列行進をした。天皇親閲

式である。私は、行進中、神と言われる壇上の天皇を、不敬ではあったが、こつそり横目で見続けた。そして、その長い間、直立不動の姿勢で、まったく身じろぎもせず、答礼をくりかえす軍装の天皇の姿に驚嘆した。「天皇も楽じゃない、お気の毒に」——心のなかのつぶやきである。

これは、話題になることも少ないのだが、当時の学校教育の基本方針が軍国主義にあったことを典型的に示す、ほとんどシンボリックな儀式であったと言つてよいだろう。

ならば、学校での日常生活のしめつけもたいへんだっただろうと思われそうだが、私の主観では、かならずしもそうではなかった。たしかに、公けの場での言説はほとんど軍国調だったが、教室空間は、まだかなりのびやかだった。

たとえば、私たちの持ちあがり担任の英語の先生。ノモンハン事件の後、どこからか軍人がやってきて、全校生徒を集めて激越な演説をぶつたのちの授業の冒頭で、こんな話をされたことを、今も覚えてい

る。

——「明治時代に、研究に没頭していて、日露戦争があったことにまったく気づかなかつたという、すごい学者がいた。ある日、弟子たちが、この先生をマツタケがりにさそい出すと、先生、上を向いてただ歩くだけ。弟子が、何をしているんですかと尋ねると、先生曰く、マツタケというんだから、松の枝に生えているんだらう。だから、マツタケを探しているんだと。昔はこういうすばらしい学者がいたものだ。……」

多分、空気の中和を目指しての作り話だっただろうと思うのだが、時流と距離をおくこんな先生が、まだ何人かいて、そんな先生がたに守られていたような感じがある。

「ナポレオンが時代を作ったのか、時代がナポレオンを作ったのか、さて、それが問題だ」などと話し出し、私にはよく分からなかったのだが、「すごい話になった。あれはマルクスだぞ」と友人を昂奮させた先生、修身の時間に、価値の問題をとりあげ、カントの倫理学を熱心に紹介した校長など、いろいろ思い出す。

外からはひと色に見えても、内部に立ち入ればそうでもない。良識を持った諸先生の名誉のためにも、この証言は残しておきたい。

では、そういうなかでの生徒がわの意識はどうだったか。その一例として、私個人の場合を取りあげてみよう。自我に目覚めもし、知的欲求が旺盛になる中学上級生のころには、私は、もっぱら愛国心ばかり強調される訓示類には、うんざりするようになっていた。別に異論を持つといった大それたことではなく、理由はただ一つ。そういう言説に魅力を感じなくなつたからである。そのスローガンにはほとんど中身がなく、五分も話せば材料切れ。そして、おなじことの単純なくりかえし。聞く方は、耳にタコという感じで、知的好奇心との乖離がどうしようもなく大きくなつてしまったというのが、実情であった。すなおな愛国心などはとくに卒業、もつと本質的なこと、新しいことを知りたい、学びたいという思いを潜在させながら、当面は受験勉強に集中といった生活だった。

軍事教練の、特に、一日を使う野外演習などは、気晴らしのリクリエイション感覚で、別にいやではなく、時々引き出される勤勞奉仕なども、同様だった。意識はリベラルになる一方だったが、まずはその程度のこと。

多少変わったことを一つだけ言えば、私は、担任の先生の影響で福沢諭吉の文集を読み、すっかりひきつけられた。それも、彼の思想や考えかたにというよりは、あの、自由自在で、しかもふしぎな活力を持つ文語文の魅力にとりつかれたのだった。それで、その文体で日記を書いたり、時には、同文体の手紙を友人に送って驚かせたりした。自分のことながら解説のしにくいヘンテコな側面を持つ少年でもあったようだ。

こうして、「お前たちは、まちがっても、マルクシズムだけでは絶対に近づくな」という配属将校の訓示を背にして、上級校進学となった。

当時、旧制の高校、専門校の学生たちの持つ基本的な雰囲気、また、そのよりどころは、大正的教養主義であったように思う。

文献で知る昭和初頭の左傾化の大波は、遮断されて、もうあとかたもなく、その系統の書物はほとんど禁書となり、好奇心にかられて、マルクシズムを学ぼうにも、手がかりがない、そんな時代であったが、その空白を静かに埋めたのは、それ以前の大正の空気だったと言ってよいだろうか。マントに高下駄という高校生風俗も残っていたし、学生の本読書は西田幾多郎『善の研究』。少年の私を持った学生生活のイメージも、好むままの自由な読書、学生相互の自由闊達な討論とい

つたふうのものだった。

私が高師（文科第一部）に入学して、半年も経ったころだろうか。一つの事件がおこった。先輩の何人かが突然消えてしまったのである。演劇のピラ配りをして、特高に検挙された、といったうわさが飛び交った。私は、その先輩を知る人もなく、ただうわさを聞いただけで、今も委細を知らない。文献で調べてみると、その年の八月に、新協、新築地両劇団の関係者一〇〇人余検挙、とあるから、あるいは、そんな波紋の一つであったのかもしれないと思う。

それから少し時を置いて、私は、学校当局に呼び出された。まず、この事件について言及があり、次いで、「君のようなタイプが危険思想におちいる。そういう考えかたを変えないなら、退学してほしい」という話であった。退学勧告である。危険思想予備軍という光栄ある判定をもらったわけだが、正直、ショックだった。勧告どおり転進しようかともずいぶん考えたが、中学の恩師の助言もあって、思い留まった。あの時代のこと、こんな時に足踏みしていたら、就学自体がややしくなりかねない不安があったからである。結果的には、この判断は妥当だったように思う。その二年半ほど後には、人文系学徒はみな出陣ということになったのだから（学徒出陣、一九四三年（昭和18）十月）。

さて、（君のようなタイプ）とは何か。特に聞き返さなかったが、大よその見当はつく。私は、かねてからのイメージに沿って、討論などは楽しみにし、そんな機会はなるべく逃さないようにしていた。ある時、「日本の論理と西洋的論理」と題する集会があった。どんな性

質の集会だったかははっきりしない。私はそこへ出て、冒頭で発言した。「日本では通用して、西洋では通用しない論理などがあるだろうか。そんなものは論理とは言わない。すべての知性が納得するものが論理であり、論理と思想とはちがう。この命題は成立しない」といったリクツである。ところが、私の発言に同調する者が相次いで出てきて、結局、集会は、入り口で頓挫してしまった。最後に、同席していたある先生が、私の方を見つめて、「君は日本人でしょうか？」と、一こと言われた。リクツを言わないこのことばは、ある意味で私の心を突き刺すものがあつて、今もよく覚えていられる。結局は、日本人という特殊を普遍に高めるのが知識人ではないかと考えて、落ち着いたのではあるが……。

これは一例で、私は、多くの議論に参加し、特に、根柢のあいまいな日本優越論と対立することが多かった。

こういうのが、私の〈タイプ〉であつた。

それがいけないというのであれば、どうしたらいいか。——公け、もしくは半公けの場では、必要なことは除いて、もういっさい発言しない。そのかわり、ひとりの時は、好きな書物と対話し、自由に考え、時流と妙な妥協はしない。——そんな覚悟をして、次のような文句を書いて壁にはつてみたりした。

黄色い皮膚を碧落の壁にかけて

さて今宵未見への出発

これならば、どんな敏腕の特高が来ても、解説は不可能だろうと、ニヤリとした。残念ながら、この文句の前半は、たしか『歷程』で読んで気に入った詩の一節の盗用である。どうも、イヤミな人間であつ

たようだ。

以後は孤立感が強かつたのではないかと思われるかもしれないが、そういうことも特にはなかつた。戦時の思想的圧力が強かつたとしても、いろいろな個性を持つ学生たちが、そう簡単にひと色に流れるわけもなかつた。類は類を呼ぶという。回覧雑誌をやらなかつたかと呼びかけてくる友人もいた。戦争など見向きもしない、先生を含む作詩グループなどもあつた。

そうこうしているうちに、一九四一年（昭和16）十二月八日、悲劇の日がやってきた。太平洋戦争の勃発である。この日を境に、学校の雰囲気はかなり変わった印象がある。

ソクラテスの対話法についての熱心な講義で尊敬していた若手のある先生が、半強制的な集会で、突然、神国日本といった大演説。——そんなことにアツと驚かされた。以前の私なら、「ソクラテスと神国日本とどういう関係がありますか」と尋ねるところだが、むろん沈黙のまま。そういうことが一度ならずとなれば、いやでも、学校の空気の変化を感じざるをえない。

当時、四年制の高師は、三年修了で文理大進学への道が認められていた。さらに、非常時につき、修業年限半年短縮ということになり、私たちの学年は、翌一九四二年（昭和17）九月に、入学以来二年半で三年修了と認められることになった。そこで私は、十月に、ほとんど逃げ出すような感覚で、広島文理科大学に進学した。どういう専門を選ぶかは一応自由だったが、私はその時、日本近代文学研究への意欲を固めていた。入ったのは、文学科国語学国文学専攻。

こうして、私に、新しい大学生活が始まった。そこはやはり、相当雰囲気がちがっていた。とり交わされるのは、つねに、肅々たる学問のことばだけで、時勢に呼応するアジテーションめいたことばが交じることがまっただくなかった。まれに、時評めいたことばが出てきたと思ったら、主旨はまったく反対で、ある教授はこう語った。「先日東京へ出張したら、大学生が四つ辻で、交通巡査に代わってゴー・ストップの旗振りをしていた。まったく情けない。学生の本分は学問にあるのに、何たるさまか。……」このことばの含意は明らかだった。当時は、大学にも配属将校が派遣され、軍事教練が実施されるようになっていた。もちろん勤労奉仕も。ひとごとではない。だが、こういう言いかたがせいっぱいだな、と聞く方は納得。

専攻での研究発表会——名簿の関係で、トップ・バッターは私というようになった。私は、永井荷風をとりあげて、かなり反時代的な空気をただよわせてしまったのだが、恐れたようにそのことが問題視されることは、まったくなかった。（誰にも話さなかったが、私には、荷風とは、彼の母方の祖父鷺津毅堂の母親（荷風曾祖母）が私の本家出身であるという、わずかな血縁があった。）

当時の専攻の文学系教授は、近世文学専門の鈴木敏也先生だった。先生は、近世文学の延長線で、明治文学への関心と造詣も深く、『草枕評釈』『たけくらべ評釈』などの著書もあり、大学では、近世小説のほか、明治文学の講述もされた。さきにも少しふれたように、日本近代文学を研究対象として認知しない大学の多かった戦前期、広島文理大は、この先生のもと、そんな制約はまったくなく、それは、私に

とって、願ってもないありがたいことであった。

先生の人柄は、文人学者と云うのが多分最もふさわしく、飄然として洒脱、温雅。考証も、深く蔵して、重苦しさを表に出さず、そういう研究室の自由感は、また格別だった。そして、卒業生も参加して時たま開かれた近代文学主題の研究会での討議は、かなり充実したものであった。ちなみに言うと、先生は、敗戦の年、一九四五年（昭和20）の十二月、先任教授として学長事務取扱に任ぜられた直後に、病没された。

とにかく、あの緊迫した戦争末期に、大学という特別自由区、さらに、こうした研究室に在籍することができたことは、幸運としか言いようがない感じがする。

先にもふれたように、私が大学に入ったちょうど一年後の一九四三年（昭和18）十月に、文科系の学生は徴兵猶予の特権停止となり、いつせいに陣することになったのだが、この時も、文理大は教育系の大学と見なされて、私たち文系学生も、残留を許された。こうして、文系学生にとって、文理大は、まさに例外的な特別自由区となったわけである。

しかし、それも長続きはしなかった。そのころ、日本の敗色は次第に色こくなり、それに比例するかたちで、軍事教練と勤労奉仕の時間が次第に増加し、自由区での時間は縮小を余儀なくされていったのだが、ついに、大学二年次の一九四四年（昭和19）八月には、授業は完全に停止となり、私たちは、竹原市の工場で宿泊勤労奉仕に入った。むろん、すべては政令にもとづくものである。

そういう措置への抵抗感はもうなかった。なにしろ、同年代の仲間

の多くは、大本營のいわゆる「玉碎」が相次ぐ悲惨な戦場で戦っているのだから。私たちは、言ってみれば思考停止の状態で、ただ黙々と働いた。私には、もう日本が勝つとは思われなかったが、負けるかたちについては想像力が及ばなかった。どう考えようもない。働く現場では、大言壮語の類いのことを聞くことはまったくなかった。

そして、敗戦の年、一九四五年（昭和20）二月には、教育系の学校も、徴兵猶予措置停止となり、四月、私は、最後の海軍予備学生として入隊した。

わずか四か月半ほどのことだが、私は今では、このどんづまりの時期の軍を体験させてもらったことはありがたいことだと思っている。望んでもめつたに得られる体験ではないだろう。観察対象としては実に興味津々。意外なこともあつて、記しておきたいことがいろいろあるのだが、これは今は省略することとする。例の広島の大惨事をすり抜けた負い目もある。

そして敗戦、復員。（私の辞書には終戦、戦後という**ことばはない**。信念、ということばも、私は戦後追放した。）しばらく休息していたら、大学から卒業証書を送ってきた。

以上が私の学生生活のあらましである。現在からの概説はなるべく避け、事実の提示を主とするように心がけたつもりである。むろん、おなじ時代を生きても、多分、体験と感想は百人百様だろう。しかし、私のそれにも、側面の側面といった程度の眞実はあるだろう。そんなつもりで読んでいただけたら幸いである。

（いそがい ひでお、広島大学・ノートルダム清心女子大学名誉教授）